慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクス的思想の系譜
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.6 (1946. 12) ,p.425(49)- 436(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19461201-0049
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19461201-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

する會話』なる一書を公にし、佛語にも飜譯せられたが、其の中には極めて確固たる諸原理が極めて快い文體で表明せられてゐる」と、此の書に就いて述べてゐる。(Jean-Baptiste Say, Traité d'économie politique, sixième éd., par Horace Say, 1841, p. 39.)。英吉利の文豪マコーレー（Thomas Babington Macaulay）は其の文名を高からしめたる『エヂンバラ評論』(Edinburgh Review) 一千八百二十五年八月號所載の「ミルトン論」(Essay on Milton.)に於いて「マーセット夫人の經濟學に關する小對話篇を讀んだあらゆる小女はモンタギュ若しくはウォルポールに財政に關して多くの教訓を與へることが出來るであらう」と言つてゐる。本書によつて經濟學に對する興味を喚起せしめられた第十九世紀前半の若き人々は決して少い數ではなかつたであらう。

マルクス的思想の系譜

平井新

（一）

ゲーテはエッケルマンとの對話の中で、ラファエルに就て、こんな感想を洩してゐる。「如何なる藝術にも親子の關係がある。大家を見れば、必ず彼がその先驅者の長所を利用したこと、まさしく、そのために偉大になつたことがわかる。ラファエルの如き人々は大地から生えるのではない。彼等は古代と彼等の以前に作られた傑作とを基礎としてゐた。彼等はその時代の長所を利用しなかつたら、大したものにはならなかつたろう」[1]と。この意味深きゲーテの言葉は、その儘、マルクスにも當嵌ると思ふ。マルキシズムはその理論に於ても、實踐に於ても今日既に批判に堪へざる幾多の矛盾と缺點とをもつてゐる。それだからと言つて、マルクスの偉大さを疑ふものはあるまい。彼の偉大さはどこから來たか。まさしくマルクスは大地から生えたのではない。實に、彼位「先驅者の長所を利用し」、「古代と彼以前に作られた傑作とを基礎とし」、「その時代の長所を利用し」た人は珍らしい。併し乍ら、既に先在する幾多の長所や傑作から、唯機械的に、より偉大な體系が生れるものとは限らない。吾等の思想を利用し咀嚼し、吸收して自家巢籠中のものとするに足るだけの透徹精鋭な頭腦が同時に存立しなければ

ならぬ。偉大な先在の思想と偉大な頭腦――この兩者が結合するところにより大なる體系が生れる。マルクスの場合がこれである。

マルキシズムは、一般に考へられてゐる樣に決して渾然融合した統一ある同質的な思想體系と言ふことは出來ない。實際に於て、マルキシズム程、折衷的なものはない。マルクスの獨創は種々樣々な源泉から出た異質的な要素を集大成した點にある。彼の體系に種々の矛盾や不統一があつたり、又彼の教義に就て色々な解釋が生じるのは、主としてこれが爲めである。

極く大雜把に言へば、マルクスは、哲學をドイツに學び、社會主義をフランスに學び、經濟學をイギリスに學んだ。そして修得の順序も、大體に於て哲學から社會主義、次いで經濟學と言ふ課程を經て、自己の社會主義體系を作り上げるに至つたのである。以下、私はマルクスの體系中、特にフランスに源泉を發してゐる若干の要素に就て、その系譜を辿つて見やうと思ふ。

（二）

宗教を阿片として斥けたマルクスの「科學」に對する敬愛は殆ど宗教的であつて、彼の生涯の仕事も亦畢竟、この「科學」を以て、社會主義を基礎付けることにあつた。そして、彼は自分の發見した「唯物史觀と餘剰價値に依て、社會主義が一個の科學となつた」ことを誇り、且つこれに依て「社會主義の空想から科學への發展」をもたらし得たものと吹聽する。單に自己の體系に「科學」の名を冠するだけなら未だしも、彼はこれに滿足せず、爾余の一切の社會主義を擧げて「空想」と貶さずには措かなかつた。爾今、マルキシズムと言へば、科學的社會主義の代名詞となりその他は悉く空想的社會主義の一語で片付けられてしもうと言ふ思想史上の不文の傳統が、いつしか出來上つて、今日ではこれを疑ふものすら殆ど無いと言ふ有樣になつてしまつた。

所が、自分の思想體系を「科學」又は「科學的」と誇り、他を「空想」又は「空想的」と貶した人は決してマルクスに始るものではなく彼以前にも決して少くない。「至る所に自分を華々しく見せようとする人々がある。」（ゲーテ）そして無論マルクスもその一人であるが、彼はその點では寧ろ後輩であつた。

私は、「自分を華々しく見せよう」としたマルクスの先輩をフランス社會主義に見出す。サン・シモンやオーエンと共に三大ユトピヤンと言はれてゐるシャルル・フーリエが卽ちこれである。彼位「科學」を尊重し、熱愛した人も少ない。彼の科學禮拜は狂信的であつた。彼は自らを社會的世界に於けるピタゴラス、ケプレル、コペルニクス、ニュートンに擬した。フーリエは自己の學說の中に「空想」を導入したとの批評を毆して言ふ。「ユートピヤとは何であるか。それは、實行手段や有效な方法を併はない幸福の夢である」。(1) フーリエによれば、彼の發見や發明は、嚴密なる數學的計算、最も實證的な豫測の上に基くものである。彼は自己の理論を「眞に科學的」のものと考へ、これを「精密科學」の中に加へる。彼は神祕主義に陷る危險を警告し、共產主義やサン・シモン主義やオーエン主義を、空想に充ちた反動的社會主義であつて、眞の科學から遠いことは、恰も、錬金術が化學から遠く、占星術が天文學から遠く、魔術が物理學から遠い樣なものであると酷評して憚らなかつた。

フーリエは、その門弟の眼から見れば、正しく新なる救世主であり、新なる啓示者に相違なかつた。又フーリエ主義者にとつては、師匠の教義は第一等の教義であり眞に科學的な唯一の學說であり、從つてフーリエは「科學的社會主義の父」(2)であつた譯である。

ピエール・ルルーは、バブーフの共產主義、サン・シモンの集產主義、フーリエの組合的社會主義を綜合化しやうとした人であるが、彼はフーリエの「無知」(3)を酷評した。この事はマルクスが曾て、ワイトリングやその

(1) エッケルマン著蘆尾英四郎譯「ゲェテとの對話」上卷二一七。

他、當時の社會主義者に對して取つた態度を思ひ起させる。イギリスのロバート・オーエンも亦サン・シモン主義とフーリエ主義の科學的基礎を否定した。

かように、マルクスの先驅者達は、程度の差こそあれ何れも、他の學派を「空想的」又は「反科學的」と罵つて、互に排擠し合つた。プルードンも亦、先行の諸社會主義宗派殊にフーリエの感化を最も強く受けたのであるが、矢張り、これ等の先輩を「空想主義」と痛烈に非難した。それからマルクスである。彼は、ローレンツ・フォン・シュタインの名著「現代フランス共產主義と社會主義」(一八四二年)で始めて、理念的にフランス社會主義を知り、一八四三年にはパリーに移つて實際にフランス社會主義を見聞し、一八四四年には早やくも、最初の社會主義的勞作を(4)「獨佛年報」誌上に掲載してゐる。これらのフランス社會主義者殊にプルードンに啓發されたマルクスも亦、先輩達の「好ましからぬお手本」まで見倣つたものか、一層烈しく先行の社會主義體系を「空想的」と罵り、これに對し自己の體系を「科學的社會主義」と誇稱したのである。こうして觀ると自分を「科學的」と誇り、他を「空想的」と貶して、「自分を華々しく見せようとする」ことは、近代社會主義の、言はゞ、遺傳的な痼疾のようなものであつて、唯、マルクスの場合が特に目立つてゐたと言ふに過ぎなかつた樣である。

(1) Publication des Manuscrits de Charles Fourier. p. 356.

(2) J. Lechevallier; Etudes sur la science sociale. 1834. p. VII, 24, 27, 49, 51.

(3) PierreLeroux; Letters sur le Fouriérisme. 1843.

(4) 最初の社會主義的勞作とは「ルーゲ宛の三書簡」「ユダヤ人問題」「ヘーゲル法律哲學批判序說」である。

（三）

マルキシズムが科學的社會主義として、サン・シモンやフーリエ等の所謂空想的社會主義から峻別される一大特徵は、現存資本家社會の崩壞と社會主義社會の出現を是非善惡といふが如き倫理的取捨の結果と見ないで、これを恰も自然科學上の法則と同樣な自然法則が社會進化を貫徹する必然的結果であると考へる點にあると一般に說明されてゐる。そして、世人の多くも亦この說明に納得してゐる樣である。併し、これ等の「空想的」社會主義者の著作を仔細に涉獵し、檢討して見ると、この說明は明かに片手落ちであることが分る。玆にマルキシズムへの過大評價、所謂空想的社會主義への過少評價が行はれてゐることは蔽ひ難い事實である。十九世記の前半は自然科學の全盛を反映して、社會の進化をも自然法則を以て說明しようとした實證主義の時代であつて、マルクスも亦、この滔々たる社會的自然主義の潮流に從つて棹さしたにすぎないのであつて、マルクスの社會進化の理論は、根本に於て何等獨創的のものではないのである。

社會主義社會の出現を自然法則的に基礎付けようとした社會主義者としては、先づサン・シモンを擧げたい。サン・シモンの歷史哲學の根底には、社會進步の根本動因を精神の變化に求めようとする觀念史觀とこれを經營の變化に求めようとする經營史觀との二元的な史觀が併存して居つて、或る時は、一方の調子が高く、又或る時は、他方の調子が强いなど、サン・シモンの眞意は必ずしも一定して居なかつた樣であるが、然し、何れの史觀からも一樣に、現代社會の必然的沒落と產業制社會——サン・シモンが求むる理想社會の名稱——の必然的到來が進步の法則の自然的歸續として豫測されてゐる。進步は、一切の社會を驅つて、その狀態を絕へず改善し、吾々を日々近付かしめる所の一つの普遍的、且つ必然的な衝動である。それは、社會を誘導し、支配する法則であつて、人間その者も唯、その道具に外ならぬ。進步の力は、吾々から生ずるものであるが、然し、吾々は、この進步の法則から脫れることも、その作用を左右することも出來ない。進步は無意識的、機械的である。かくて、

個人的自由に基く今日の資本主義は、個人を束縛する封建的經營組織に對して、その存在權を確立する社會進化の必然的一環若くは一段階であつたが、今や、その課せられた歴史的使命を果し終らんとしつゝあると同時に、その體内には新なる社會が、既に強く胎動して居て、産業者階級の手に取り上げられる日を待つてゐる。この社會が、サン・シモンの翹望する産業組織又は産業制社會である。彼は、この社會革命の過程が、國王と産業階級との抱合の下に、平和裡に進めて行かれるものと考へてゐた。暴力革命は、彼の採らざる所であり、獨り彼のみならず、この時代のフランス社會主義者は、概して、社會變革方法として、專ら平和的手段に訴へることを常道とした樣であるが、これは詮ずる所、暴力を逞しうしたフランス大革命の反動と看做る可きであらう。

フーリエも亦、調和の社會は、神に依て豫定された人間社會の進化の結果として不可避に到來すべきものと考へると共に、今日の社會の靜穩は恰も新噴火前夜のヴェスヴィオスの沈默と同樣に唯、表面的のものにすぎないと暗に暴力的社會變革の可能性を述べてゐるが、それは單に一個の警告に過ぎないのであつて、彼は決して暴力革命の必至を主張したのではない。社會進化の必然の理法を認識することに依て、今日の社會を平和裡に社會主義の調和社會に推移させることは決して難しいことではないと觀測してゐた。茲で私は、マルクスが「資本論」の中で「資本制生産は、一つの自然行程の必然性を以て己れ自身の否定を造り出す。(1)」「社會は自然的な發展段階を飛躍することも出來なければ、立法を以て、それを除くことも出來ない、が生みの苦しみを短縮し、緩和し得ることは出來る(2)」と言つてゐることを思ひ出す。フーリエとマルクスとの關聯の詳細に就ては、無論こゝで述べる遑はないが、兎に角、右の點に關する限り、兩者の行論が同調であることは誰しも直に氣付くことであろう。これと類似の社會觀は又同時代のペグールやヴィダールやルルーやプルードンにも見ることが出來る。彼等は何れも社會主義の到來を不可避的のものと考へてゐた樣である。マルクスの豫測は是等のフランス社會主義の豫測を唯、異つた言葉で反覆したものと考へても過言ではないと思ふ。唯、マルクスの豫測を強く裏付けてゐるものが、彼の深奥なる經濟學の知識であることは忘れてはなるまい。尚、茲に指摘して置き度いことは、社會主義の必然性に就て以上擧げたフランス社會主義者とマルクスとの間に存する相違である。前者の多くは社會主義到來の歴史的豫側を條件的なものと見るに反して、マルクスは、これを絶對的且つ無條件的のものと考へたことである。ここに、自然科學に深く傾倒して、徹底的な決定論を信奉するマルクスの性格が強く表はれてゐるのを見受ける。

（1）高畠譯「資本論」第一卷第二册七五七頁。

（2）「資本論」第一卷序文。

（四）

マルクシズムを空想的社會主義から區別する今一つの大きな特徴は、前者が社會主義實現と言ふ重大な歴史的使命をプロレタリヤに課して居ることである。マルキシズムに於ては、社會主義とプロレタリヤとは内的に深く結合する。マルクスによれば、科學的社會主義はプロレタリヤ運動の理論的表現である。プロレタリヤのブルジョウジイとの闘爭は社會主義闘爭である。社會主義の理想は又プロレタリヤの理想である。プロレタリヤは自己の解放のために闘ふことに依て全人類の解放と社會主義の勝利のために戰ふものである。かようにマルキシズムに於ては、プロレタリヤが社會主義運動の唯一の擔當者として甚しくて偶像化され、理想化されてゐる。

マルクス以前の社會主義に於てプロレタリヤの觀念は如何に取扱はれてゐるか。

バブーフの共産主義は近代社會の個人主義的組織の爲めに苦悶する一切の貧困階級の解放を全般的に意圖するものであつて、決して單にプロレタリヤの利害だけを目

標としたものではない。併しバブーフの著作の中に既にプロレタリヤの語が使用され、彼の興味に觸れてゐたことは注目に價することである。彼は、プロレタリヤに就て次の様なことを言つてゐる。「收奪された人々、即ちプロレタリヤの大衆は恐るべきものであつて、この大衆が、所有者階級を除き、極めて墮落した國民の大多數を形成することは少くとも人の承認するところであらう。」[1]と。

サン・シモンの興味の焦點は、産業階級の解放であつて、プロレタリヤは、この階級を構成する極めて無力・無知且つ無名の一分子として尙まだ、サン・シモンに問題視されるとは至つてなかつた様である。彼は、プロレタリヤが同じく産業階級の中にあつても、有産者とは自ら別個の集團をなして、特殊の性質をもつてゐる事實を否認はしないが、併しプロレタリヤを特別の階級と看做す迄に至つては居ない。プロレタリヤと企業家との間に有する明白な區別は、彼に依れば、單に表面上のものであつて、その對立は誤解に基くものである。

サン・シモン主義者になると、この點の認識は餘程進んで、既にプロレタリヤの解放の理想を實現せんとの明白な意圖を示すに至つて居る。アンリ・ボーは Je suis prolétaire と熱叫し、アンファンタンは Nous sommes prolétaires と聲明し、ステファン・フラシャーはアベ・シエースの故智に倣つて、Qu'est-ce que les prolétaaires? と自問自答してゐるなど、いづれもこの間の消息を物語るものであらう。然しサン・シモン主義者は過度にプロレタリヤを理想化する様なことはなかつた。彼等は、プロレタリヤの能力を充分に理解して居たが、革命による混亂の結果、一方に於て、無政府と産業の破滅が起り、他方に於て新なる壓迫と搾取とが生ずるのを恐れたのである。

フーリエは、プロレタリヤが文明の脅威であることを絶へず繰り返してゐる。フーリエに依れば、今日、人民大衆は顚覆と革命の性向しか持つてゐない。何故なれば「彼は失ふべき何物をも持たない。そして總てを得ることが出來るからである」[2] (Il n'a rien à perdre, et Il paut taut gagner) このフーリエの言葉を讀んだ者は恐らくマルクスが「共産黨宣言」の末尾を結んだ有名な一節「プロレタリヤは自分の鎖より外に失ふべき何物も持たない。そして彼等は獲得すべき全世界を持つてゐる」を思出すに違ひない。「革命的階級は失ふべき何物をも持たない」と言ふ表現は當時可成り廣く行はれてゐた一種の流行思想であつた様である。

フーリエ及びその一派の人々は暴力革命の徒ではない。彼等はこれを脅威として呪ひ、これを避けようとした。彼等の理想は全人類の解放と言ふ普遍的な理想であつて、只單にプロレタリヤの解放と言ふが如き特殊のものではなかつた。彼等はプロレタリヤを理想化せず又階級闘爭を說かない。プロレタリヤと資本家とを社會改造の事業に同時に包攝しようとする。フーリエ主義者シャルル・キュスはロォレンツ・フォン・シュタインの著「現代フランスの社會主義と共産主義」を評するに當つて、シュタインが一切の社會黨を「プロレタリヤの排他的辯護人」と見做してゐることに強く反對してゐる。[3]

バブーフの流を汲むブオナロッチ一派の共産主義者達は私有財産制やブルジョワジイを敵視し、自らプロレタリヤの代言人を以て任じたが、ブランキはプロレタリヤを理想化せず、又彼等を共産主義革命を遂行するに足る能力を備へてゐるものとは考へなかつた。同じくバブーフの流を汲む者でもプロレタリヤに對する態度は一様ではなかつた。例へばカベーは、社會改造上、一切の社會階級の好意に訴へて「ブルジョワジイ」を除外しなかつたが、デザミーは、ブルジョワジイの協力を無用として「勞働者よ、團結せよ」と說いた。一八四五年丁度「共産黨宣言」の出版される三年前のことである。被壓迫階級の團結思想は豫想外に古いものであつて、十八世紀の初め、共産主義者ジャン・メリエが、その「遺書」の中で、Unissez-vous done, peuples si vous etos soges; Unissez-vous tour si vous avez du coeur pour vous

délivrer tous de vos misères communes（人民よ、賢明ならば團結せよ。共同の不幸から解放されたいと願ふならば、總て團結せよ）[4]と言つてゐるのが、私の知る限り最も古いものではないかと思ふ。サン・シモンは「團結は力である」と言ひ、又フロラ・トリスタンは「勞働者よ團結せよ」と述べて、夙に、マルクスの「萬國のプロレタリヤ團結せよ」を豫想させるものがある。

始めて近代プロレタリヤの概念に明確な定義を與へたものはピエール・ルルーの友人で、その協同者であつたジャン・レイノーである。それは一八三二年のことである。彼は次の如く言つて居る。「人民は、條件を異にし、利害を異にする二つの階級、即ち、プロレタリヤとブルジョワとから成る。プロレタリヤとは國民の一切の富を生産し、日々の勞賃しかもたず、その勞働は、自分達の力の及ばぬ原因の爲めに左右され、毎日、自分の勞苦の成果の僅少部分しか受取らず、老後の救ひを病院の一隅に與へらるるか、早死するかする外に道のない人々のことである。[5]」ピエール・ルルーも、この點に就てはレイノーと一致してゐた。ルルーは、プロレタリヤを定義してその所得が生活費に及ばない市民であるとなしてゐる。"Le prolétariat n'a rien à perdre, mais il a tout à gagner"（プロレタリヤは失ふべき何物も持たない。而も、獲得すべき總てを持つてゐるのだ。）

マルクスの言葉だと早合點する人が多いと思ふが、これがプルードンの言葉と聞かされて意外に思ふ人も尠くはあるまい。ヴィダールの著作にも"I (le salarié) a tout à gagner et rien à perdre"（彼（賃勞働者）は獲得すべき總てを持ち、失ふべき何物も持たない。）[6]と言ふ章句が見へてゐる。曩に擧げたフーリエの言葉と言ひ、又プルードンやヴィダールの言葉と言ひ、この種の思想は當時、既に熟してゐたものと考へられる。プルードンはプロレタリヤの地位と意義とを、既に明瞭に認識してゐた。彼は、社會主義の本質を資本に對するプロレタリヤの抗議と看做した。[7]然しプルードンの社會主義は決して工業的プロレタリヤの解放のみを目標としたものではなく、廣く農民を含めたものである。彼は一切の暴力的革命の反對者であつて、勞働者と資本家との和協を主張した。固より將來社會實現のイニシャティヴは專ら勞働階級の手にあるものではあるが、勞働階級には創意と準備とが充分とは言へないから、勞働階級はブルジョワジイと協力すべきものであると說いた。プルードンは屢々ブルジョワ階級とプロレタリヤ階級の間に不和の種子を蒔く種々の企圖に反對し社會主義の目指す所は階級平和にあると主張した。プルードンにとつて、社會問題は、單にブルジョワジイに依るプロレタリヤの搾取といふが如き事實に限らるゝものではなかつた。彼は亦屢々プロレタリヤや勞働大衆の心理と德性を悲觀し、プロレタリヤに依る全社會の搾取の危險さへも豫測してゐる。

以上述べた所に依て明かなるが如く、マルクス以前のフランス社會主義者は、社會主義に於けるプロレタリヤの意義を明かに認め、プロレタリヤの解放を以て、社會主義の本質的目的の一つと看てゐる。併し、彼等の社會主義は、マルクス的意味に於けるプロレタリヤ社會主義ではなく、彼等の理想は單なるプロレタリヤの理想ではなかつた。彼等は社會主義革命とプロレタリヤの解放を同一視せず、又プロレタリヤの利益を社會主義の指標とはしない。プロレタリヤの解放よりも、もつと廣汎な全人類の解放こそ、彼等の念願であつた。彼等はプロレタリヤを理想化しない。階級鬪爭を說かない。暴力革命は少數のバヴーフ主義者を除いて一般に廣く排斥された。

これに反しマルクスは社會の歷史的過程とプロレタリヤとを極度に理想化し、階級鬪爭を社會主義實現の槓杆とし、暴力革命をも事情に依つては敢て辭せなかつた。

この結論上の相違は姑く措き、マルクスは、先在する是等フランス社會主義の諸思想を涉獵し、咀嚼し、取捨して、獨自の體系を作り上げたのであるが、一度これ等「先驅者の長所を利用し」盡した後は、飜つて、これに「空想的」の話を投げ與へた。マルクスは「自分を華々

しく見せようとする」先輩達の「悪いお手本」までも承け繼いだのである。

(1) Adolelle; Histoire de Gracchus Babeuf dt du babocoisme. 1884. t. II. p. 51.
(2) Fourier; La fausse industrie, 1835 t. I, p. 412-413.
(3) La Phalange; 8 Nars 1843. p. 1765 1766.
(4) Le Testament de Jean Meslier. 1861. p. 382.
(5) Jean Raynaud; De la nécessité d'une representation speciale pour les prolétaires Revue encyclopédique. t. 54. 1832. p. 12-14.
(6) Vidal; De la réportition des richesses. 1846. p. 277.
(7) Proudhon; Avertissement aux propriétaires. P 110 111.

連雀町、連雀座、連雀商人

伊東彌之助

一

物の背負具に「れんじやく」と云ふ簡單な道具があつて、自家用の小運送に今尙東日本の農村の廣い部分で使用されてゐるものがある。其の形は場所によつて多少の差違があるらしい。或は擔ぎやすい樣に肩に當る部分の繩が廣く平たくなつてゐるのもあれば、木の枠のついたのもある。そうした繩の廣い部分や木の枠には裝飾的な模樣や美しい色彩を持つたものもあるとの事であるが、「れんじやく」が恐らく素朴な繩狀のものであつた頃、これが荷物運搬に重要なる役目を果した時代があつた。

和泉流の狂言「連雀」に『誠にこの連雀と申す者は重寶な物で御座る。この絹布等をあらけない棒で荷うても不都合に御座る。斯樣に連雀に致し負うて參れば、どれからどれへ參らうと儘で御座る』（註一）とある樣に、商人は「れんじやく」で商品を擔いで市場へ出た。「れんじやく商人」と云ふ言葉がそこに出來、「れんじやく」だけでそうした商人を指す迄になり、更に「連雀町」と云ふ地名さへ現はれた。「れんじやく商人」及び「連雀町」については小野均氏が「近世城下町の研究」の中で觸れられてゐる。即ち氏によれば「れんじやく商人は即行商人」であると云はれ、「連雀町とは其の連雀商人の集る町」の